第９回調査：2023 年 3 月 21 日　参加者 7 名

重岩北谷筋を２グループで踏査し、矢穴石を発見した。谷筋には近代・現代石丁場の遺構が見られ、一部石引道も残っている。

参加者一覧

橋詰茂・森下英治・大嶋和則・高田祐一・梶原慎司・松田朝由・上野進・小原一朗・坪佐利治・中西裕見子・大川大地・岡上峰康・川宿田光憲・川宿田好見・柴田早穂・森亜紀子・村瀬龍宇一・出口明澄・西村祐紀・谷岡花音・金丸歩美・西真人・山吹竜也・岡田茉梨愛・佐野楓夏・山﨑美由紀

（橋詰）

Ⅱ．藤堂家丁場（福田地区）の調査

兵庫県姫路港への航路をもつ福田地区は小豆島北東部の要衝地である。播磨灘に東面し古来より海運条件が整った良港で、小規模ながら東西 570 m、南北 450 mの可耕地を有する平野がある。平野の北には伊豆川、南には森庄川が流れ、このうち森庄川下流東岸に南から北へ伸びる急峻な細尾根がある。空中写真でみても頂部に岩肌が見えるほど花崗岩の岩脈に覆われている。

福田地区は江戸期の大坂城築城期における藤堂家の丁場として知られ、石井家文書「小豆島高反別明細帳」には、大坂城築城から数十年が経過した明暦 3 年（1657）の福田の御用石場として、「西谷」「東谷」「栃面地」「鯛網代」「荒浜」の 5 箇所が記されている。そのうち荒浜を除く 4 箇所が藤堂和泉守高次の管理する丁場と記されている。なお、荒浜は播州商人（与兵衛）による管理と記されている。

過去の調査では、福田地区の南側海岸に矢穴跡を残す種石の所在が判明しており、今回の調査では、本丁場跡から北西 630 mの伊豆川沿いでも大形の石材採取痕跡があり、同時期の石丁場跡の存在が判明している。これらの石丁場跡と文献記事との照合作業が今後の調査研究課題である。

１．小豆島町指定史跡「大坂城築城用残石」の調査

福田地区の北端付近、尾根筋西側の「森滝」と呼ばれるエリアに、矢穴跡を残す大形の石材 2 基が存在する。付近には花崗岩片が多数分布しており、一帯は小豆島町指定史跡「大坂城築城用残石」に指定されている。

石材の一つは、長辺 4.5 m、短辺 1.8 m、厚さ 1.3 mの大きさで、断面は台形である。母岩から破断した割面を下にして残存し、上面は自然面に覆われる。接地する下端縁辺に

写真 3　小豆島町指定史跡「大坂城築城用残石」

矢穴跡が廻る。矢穴口の長辺は約 13cm である。また、小口付近に長軸直交方向で同サイズの矢穴跡が残るが、割断には至っていない。

もう一つの石材は、長辺 3.1 m、短辺 1.3 m、厚さ 1.0 mの大きさで、断面は同様に台形である。現状で山側の面が母岩から破断した割面で、山側上縁に長辺約 13cm の大形の矢穴跡が延長約 2 mにわたって残る。海側の面は自然面である。小口は片面のみ割断しており、同サイズの矢穴跡が残る。いずれの石材も矢穴跡の大きさから見て、江戸期の大坂城築城に供された石材の残石であり、自然面を残すことから母岩から初期に割断した石材と推定できる。周辺に散在する花崗岩片を含め、その時期の石丁場跡が存在したものと判断できる。

また、これらの石材から東に約 100 m隔てた尾根筋の東側で、矢穴跡を残す花崗岩の岩盤がある。そして、近くに矢穴跡を残す石材を集めた箇所がある。したがって、尾根の東側にも同様に石丁場跡が所在した可能性があり、今後踏査を行う予定である。

（森下）

２．大山津見神社周辺の丁場の調査

福田港から西へ約 700 mの地点、大山津見神社へ向かう道沿いで、神社手前約 50 m左（南東）側に位置する。道に沿って左側は谷状地形となっており、その最深部に当たる。谷状地形の行き止まりに谷と直交して花崗岩の巨石が存在し、石材の上部全体に幅約 10cm、深さ約 15cm の矢穴が見られる。同石材の下部前面にも石材が露出しており、何石かの石材が存在する可能性が考えられた。しかし、落葉や倒木、周囲の立竹木が存在し詳細が不明なことから、当該丁場の実態把握と見学環境の改善を目的に、「小豆島石のシンポジウム 2023」の現地研修において約 10 名の協力を得て当該石材周辺の清掃を行った。

清掃を行ったところ、石材下部前面に見えていた石材を含め、元々は一つの石材であることを確認した。石材の大部分が埋没しており、現状で確認できる規模は、幅約 8.1 m、高さ約 2.3 m、奥行き約 1.9 mである。石材は上面から矢穴によって大きく面的に割っている。さらに割肌の正面から水平に割ろうとしていたようで、南東部では上面より約 2 mの位置に矢穴が見ら

写真 4　大山津見神社周辺の丁場